

---

# EL-Online (改)

アルタイル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

EL-Online（改）

### 【Nコード】

N2802Y

### 【作者名】

アルタイル

### 【あらすじ】

レッドカラー、そう呼ばれる存在であるがゆえに戦いを禁じられた少年。彼は戦いを求めて幼馴染とともに、世界初のVRMMOであるEL-Onlineのテスターになった。しかし、そうして訪れた仮想世界はすぐに恐るべきデスゲームと化して！天を模して造られた世界と狂信的な運営。密かに選ばれていた1500人のテスターたち。すべてが破滅へと歩みを進める中、少年は加速しながら刀を振るう。

EL-Onlineの改訂版です。

展開についてどうしても納得できなかったので、再投稿です。たびたび申し訳ありません。

## ブローグ

果てしなく広がる荒涼とした大地。かつて霞ヶ浦と呼ばれた湖だったそこは、今はその面影すら感じられぬほど乾ききっていた。直径数十キロにも及ぶ広大極まるこの荒れ地には樹木すらまばらで、さながら砂漠のようですらある。

その荒れ地の中心地に、巨大な都市が聳えていた。見事な円形を描くその都市は砂漠に浮かぶ島のように、中には高層ビルが押し込められたようになっていた。周囲の寂しさからはおよそ想像もつかぬほど煌びやかな都で、輝くガラスやビーズをばらまいたようだ。

されど、都市は高い壁で守られていた。周囲の物を一切拒むかのような、高い高い壁。それは見上げれば上が霞んでしまうほどで、人が上ることなど不可能に思えるほどだ。さながら天地の境目のようなこの壁でもって、都市は周囲からほぼ完璧に遮断されている。

だが、その壁には巨大な扉が付けられていた。そこへ向かって、まっすぐな一本道が通っている。外界と都市との唯一のつながり。そんな道を、黒いバスが何台も車列をなして疾走していた。バスの車体には紅い文字で「Mardock Brain」と書かれている。

「ここが美玖波か」

揺れるバスの車内で、一人の少年がつぶやいた。彼の手には「E L-Online テスター当選通知」と書かれた紙が握られている。彼はその紙と車窓から見える景色を見比べながら、どこかわくわくしたような顔をしていた。

そんな彼の隣には一人の少女が腰かけていた。つややかな黒髪を肩まで伸ばした、古風な雰囲気のある少女だ。彼女はその凜とした眼を緩ませると、隣の少年に話しかける。

「直人、楽しそうだな」

「そりゃそうさ。環だって、楽しみにしてたんだろ」

「もちろん。ゲーマーの憧れだぞ？　楽しみでないわけないじゃないか」

環はそのはちきれてしまいそうなほどの胸をドンと突き出した。その顔は誇らしげで、希望に満ちあふれている。それも当然かもしれない。彼女たちは世界中の人々が憧れる夢の切符を手にして、今まさに理想郷へと赴こうというのだ。希望を感じていないわけがない。

少年こと直人もそう思ったようだ。彼は「そうだよな」と一言つぶやくと、また視線を車窓へと移す。その眼は夢を見ているようで、顔はどこかうつとりとしている。まるで熱に浮かされたようだ。そんな彼は遠くを見ながら再び薄く唇を開く。

「……あそこに行けば、もう一度刀で戦えるんだよね？」

「当たり前だ。一度どころか幾らでも戦えるぞ」

環の言葉に、直人はわずかながらほつとしたような顔をした。わかりきっていたことではあるが、彼は確かめずには居られなかったのだ。戦えるかどうかを。それほどまでに彼は戦いを求めている。

いや、正確には戦いに飢えていたというのが正しいか。

こうして直人がほつとしたような顔をすると同時に、チャイムのような音が流れてきた。直後、ポンと音がして車内アナウンスが始まる。

『まもなく美玖波学術特区内へと入場いたします。特区内へと入場しますと、約三分ほどでマルドゥック・ブレイン本社です。皆様、いまのうちにお忘れ物がないよう、荷物をまとめてください』

アナウンスに従い、素直に荷物をまとめ始める直人と環。二人がそうしている間にも、バスの車列は巨大な門の隙間を潜り抜けた。たくさんの人々の夢や希望を乗せて。

## 第一話 レッドカラーの少年

今から約一週間前の七月半ば。暑さのあまり人影もまばらな道場で、直人は一人、黙々と竹刀を振るっていた。竹刀の切っ先は先ほどから寸分たがわぬ直線を描き、心地よい風切り音を響かせる。同時に踏み込む足も、板敷きの床を気迫とともに激しく揺らす。その動きは流麗で、隙も無駄もほとんどない。少年の実力は相当な物のようだ。

だが、そんな直人を見ている何人かの門下生の視線は、決して尊敬の意味合いなど含んではいなかった。憐れみとかすかな侮蔑。彼らの視線に含まれる感情はほとんどそれだけである。なぜなら直人がどれだけ努力しようと、どれだけ強くなろうと、活躍の場が与えられることなどないのだ。直人は『レッドカラー』なのだから。

いまから三年前、直人が十四歳の冬。突如として彼はレッドカラーであると発覚した。以来、三年間にわたって彼は公式試合どころか練習試合への出場も禁止されている。それどころかそれまでに得た段位も、勝ち得てきたトロフィーなどの栄光もすべて彼は奪われていた。レッドカラーとは、それほど大きな意味を持つ言葉であったのだ。

だが、彼は剣道をやめることはなかった。剣を振るうのが好きだったから。心のどこかにもう一度戦えるかもしれないという希望を抱いていたから。ただそれだけの理由である。ゆえに直人は今日も竹刀を振り続ける。もう、戦いへの渴望は満たされることがないとうすうす感じながら。

夕方、生ぬるい風が僅かながらも冷たさを帯びてきたころ。ようやく直人は竹刀を振るのをやめた。彼は渴いたのを潤すべく水筒を取りに向かう。夕陽に影を差しながら、彼は道場の隅に置いた荷物へと歩く。その時、彼の視界に青い何か飛び込んできた。彼はそれをとっさに手で受け止める。不意に、しかもかなりの速度で投げられた物体をいともたやすく。

そうして受け止めてから、彼は軽い自己嫌悪に駆られた。この『常人を少し超えた』動体視力こそ、彼がレッドカラーとされている理由だった。ゆえにそれを使ってしまったことに、言いようもない不快感を覚える。彼はハアッと息をつく、投げられてきたペットボトルを床に置いた。そしてペットボトルが飛んできた方向を見るとそこには、見知った幼馴染の顔があった。

幼馴染こと環は『自家発電』で音楽プレイヤーを聞いていた。文字通り身体から電気を出して、音楽プレイヤーを充電しているのだ。そのレッドカラーのゆえんたる力を隠そうともしない態度に、直人は何となく自分とは違うと感じる。嫌悪などではなく、あくまで違いを感じるだけだが。

そうして直人が微妙な顔をしていると、環はイヤホンを外した。彼女はそのまま直人にゆっくりと近づいてくる。

「久しぶりだな、直人」

「何か月ぶりだ？」

「おいおい、まだひと月もたってないぞ。ま、この道場で会うのは



中学以来だろうが」

環と直人は中学まではこの道場で共に修行している仲だった。だがレッドカラーであることが判明して以来、環は道場を辞めている。道場に残った直人と去った環。そのことがきっかけでなんとなく気まずくなった二人は、今では少し疎遠になっていた。以前は毎日のように互いの家へ出かけていたのが、今ではひと月に一度出かければいい方である。

そんな環が、なぜ直人に会いに来たのだろうか。しかも二人にとってはタブーとも言える場所であるこの道場へ。直人はスツと眼を細め、環を睨んだ。すると環は、その揺れんばかりの胸元から手紙のようなものを取り出す。

「フフツ、今日はこれを直人に届けに来た」

「なんだこれ？ …… って、これどうやって手に入れたんだよ！」

紙にはE L - O n l i n e の テスター当選通知と書かれていた。直人はそれを見て眼を丸くする。

E L - O n l i n e とは、マルドゥック・ブレイン社が発表した世界初のVRMMOのタイトルである。仮想現実技術を使い五感のすべてを体感できるということで、世界を騒がせているゲームだ。その話題性たるや、ゲーム関連のネット掲示板が過負荷でサーバーダウンを起こすほどである。

そのE L - O n l i n e のリリースに先立ち、夏休み期間にマルドゥックの本社に泊まり込みで約一ヶ月間の テストが行われることになっていた。当然、そのテスター枠には応募が殺到し、宝くじ

並みの倍率を勝ち抜かなければテスターにはなれないはず……なのだが。強運な環は見事テスターになる権利を勝ち得たようだ。

「二人分応募して置いたら当たってたんだ。どうだ、一緒にプレイしないか？」

二枚の当選通知を見せびらかして、ニヤツと笑う環。その顔は自信満々だ。それもそうだろう、直人ぐらいの年頃の人間たちにはあこがれの当選通知なのだ。だがそれに対して、直人は少々申し訳なさそうに顔を下に向けた。彼の唇が薄く開かれ、ぼそぼそと言葉が紡がれる。

「ごめん、せつかくけどやめとく。お前一人で楽しんでこいよ」

「つれないなあ、こーんな美少女が誘ってるっていうのに」

「……お前、見た目は最高だけど中身は半分男じゃないか」

シャツが裂けそうなほど膨らんだ胸を寄せて色っぽい顔をした環を、直人は斬って捨てた。女や胸に興味はある……というより両方とも大好きな直人だが、環は別だ。そのガサツすぎる本性を彼は知りすぎていた。もつとも、環が本気だというなら相手をするのもやぶさかではないだろうが。

「くッ、相変わらず失礼な奴だ。こう見えて私はモテモテなんだぞ？ ……まあ、そんなことは置いといて。E L - O n l i n eでは刀を使って戦うこともできるんだが、それでも嫌か？」

「……………！！」

薄くなっていた直人の眼が見開かれた。彼は環の手から驚異的な動作で当選通知を奪い取ると、食い入るように見つめる。その表情は、どこか虚無感の漂っていた先ほどまでとは違って、活力に満ちていた。そう、レッドカラーだと告げられる以前の彼のように。

「ククッ……」

彼の口から、かすかに音が漏れた。その空気音は段々と大きくなっていく。そして

「……ハハハッ、わかった！ E L - O n l i n eをやろぞ！」

少年の叫びが、人気のない道場にこだました。

## 第二話 少女（前書き）

展開に無駄が多い、直人の個性を生かし切れていないという指摘を受けたためまったく新しく造り直しました。たびたび申し訳ありません。

## 第二話 少女

天空に螺旋を描くビル。さながらガラスの塔のようなそれは、陽光を反射しながら蒼空に聳える。その頂は雲に突き刺さり、霞んで見えるほど。周囲に林立する高層ビル群と比べても、その高さは頭一つ抜けていた。

そのビルの頂上付近には蛍光緑の文字でMardock・Brainと描かれていた。この建物こそが、E・L・Onlineの開発元であるMardock社の本社ビルである。テストはこのビルの中で夏休み期間の一か月、泊まり込みで行われることとなっていた。

直人たちテスターは、すでにビルの中にいた。ひとしきり社内を案内された彼らは、映画館のようなホールに集められている。そのホールは千五百人のテスターたちが入ってもまだゆとりがあるほどの広さだ。直人と環はその扇形に並べられた座席の前の方に腰かけると、正面につけられているディスプレイを見た。

「これから何が始まるんだろう？」

「さあな。説明会でも始めるんじゃないのか」

「うーむ……」

直人はフウッと息をついた。これから何を行うかについては、彼らには一切知らされていない。このマルドゥックという企業は秘密ごとが好きな会社のようなだった。先ほどの社内案内でも、そこかしこに立ち入り禁止区域があったのを彼は覚えている。

そうしてしばらくすると、唐突に照明が落とされた。ブザーが響き渡り、ホールに緊張とざわめきが走る。何が起こるのだろうか。テスターたちの不安と期待の入り混じった声が聞こえてきた。

瞬間、光が砕けた。ガラスが砕けるような映像が流れ、直後、壮大な音楽が流れ始める。幅十メートルはあろうかという巨大ディスプレイに、華麗にして壮大な風景が映し出された。百花繚乱の野原、空にゆたう大陸、星が降り注ぐような平原……。荘厳な自然やそこに生きる人々の美しい姿が次々と絵巻のように流れていく。直人も環もその圧倒的な映像美に目を奪われた。

その映像の最後に M a r d o c k ・ B r a i n と会社名が大きく映し出され、同時にロゴが浮かび上がった。黒地に紅で、仮面を模したような物が描かれたロゴだ。かなり陰鬱で、呪術的な物を思わせる。企業のロゴにはあまりふさわしくないように思えた。

直人はあまり趣味の良くないロゴに眉をひそめた。だが一方、環は眼を輝かせる。その顔は興奮する少年のようだ。それを見た直人は環があると病を患っていたことを思い出し、苦笑する。中学はとつくに卒業していたが、まだその病気は治っていないようだった。

そうして直人と環が過ごしていると、明るくなったステージの上に男が上がってきた。デザイナーズスーツをパリッと着こなした、出来る男の見本のような男。だが、そのまだ四十前後とみえる若々しい顔には黒い影がちらほらと見え隠れする。直人はそんな男を見て、ゲームの責任者か何かだなと思った。

「こんにちは、私はマルドゥック・ブレイン社代表取締役の黒柳です。このたびはわが社の新製品、E L - O n l i n e の テ ス ト に

「ご参加いただき誠にありがとうございます」

男の挨拶に、ワツと拍手が鳴った。会場全体にバチバチという音が響き渡り、何やら声まで上げている者もいる。ステージ上の黒柳はそんなテスターたちに、にこやかに笑いかけながら話を続けた。

黒柳の話はそのほとんどが事務的な連絡とE L - O n l i n e のごくごく基本的な説明に終始した。いずれも事前に渡されたパンフレットに載っているような内容ばかりであり、目新しいものはさほどない。さすがに一流企業の代表を務めるだけあって、人を引き付けるような話し方をする黒柳であったが、内容が内容だけに直人は話の後半部分をほとんど聞いてはいなかった。それは環も同様なように、直人の耳にすやすやという寝息が聞こえてくる。

こうして直人があくびをした時。突如として黒柳の話のトーンが上がった。その音程の変化に、直人は眠そうな目をこすってステージに注目し、隣の環もあくびをかましながら起き上がった。二人はそのまま、熱弁をふるう黒柳へと視線を集中させる。

「では最後にE L - O n l i n e 開発チーム主任、神流からのあいさつです！」

黒柳がひどく仰々しい態度でステージの袖の部分を示した。ゲームの開発者を迎え入れるべく、テスターたちから盛大な拍手が巻き起こる。E L - O n l i n e の開発者については今まで、その一切が謎に包まれていた。それが明らかになるとあって、会場の興奮は尋常ではない。広いホールの中はさながらスタンディングオベーションのような状態だ。直人と環もそれに巻き込まれるような形で拍手を送る。

その嵐のような音量と会場中の注目の中に、小さな人影が現れた。ひどく細く華奢な印象のその人影は、まっすぐにステージ中央へと向かっていく。その姿に、拍手がにわかにまばらとなった。直人と環も驚きのあまり目を丸くする。

「環、あれつてもしかして……」

「いやまさか……」

どよめく客席、響く疑問。そんな中で渦中の人物は何事もないかのように平然とステージ中央にたどり着いた。その人物はちよつと背伸びをしながらマイクの高さを調整する。そして、ひどく無機質かつ事務的な口調で告げた。

「みなさんこんにちは、私が神流です」

ひどく幼く頼りなげな声。儚げで神秘的なそれは、客席のテストたちの耳によく響いた。テストたちはその声に、神流の年齢を確信する。

どう考えても、十代前半ほどの少女だと。

綺羅星のごとき街灯、ネオン。この閉鎖都市 美玖波の繁栄を象徴するかのように、その暗い影を覆い隠すかのようにそれらは輝く。そのまばゆい光を眼下に見下ろす展望レストランで、直人はガラスにもたれながら明日に思いを馳せていた。彼はグラスに入った



ジューズをワインよろしく燻らせながら、フウと軽く肩を落とす。

ゲームの開発者が少女だというのは、すさまじいばかりの驚きをテストたちにもたらした。葵の登場直後、広いホールは彼らの悲鳴じみた声に包まれ、直人の耳が痛くなるほどだった。あのどよめきを、直人は鮮明に覚えている。それほどのインパクトがそれにはあった。

しかし、それが静まったのもあつという間だった。神流葵の弁舌の才は悪魔じみていた。いや、人を魅了するという意味ではある種の宗教家に近いのかもしれない。とにかく、彼女が口を開いた途端にテストたちは黙った。スウツと脳に侵入してくるような甘い美声、一切の澱みなく続けられる話。そのすべてが、テストたちの口を閉じさせた。彼らはまたたく間に彼女の話に夢中になり、声を上げることのない聞き手に甘んじたのだ。

「ああ、胡散臭い……」

直人はそう愚痴っぽく漏らすと、レストランの中へと視線を移した。たくさん人間たちが、舞踏会よろしく談笑したり食事に舌鼓を打っている。いかにも楽しい雰囲気、そこには広がっていた。

葵の挨拶が終わった後、テストたちはさまざまな検査を受けさせられた。そしてその後、彼らはこのレストランで運営主催のパーティーに参加している。テストの前夜祭と、テスト同士の懇親会を兼ねたパーティーのようだ。

そんなパーティーで、直人は壁の花に徹していた。もともとこういう会は苦手であつたし、今日はそういう気分でもなかった。運営の人間たちが胡散臭くてしょうがないのだ。直人は彼らから、どこ

か異様なものを感じていた。まるでカルト教団にも通じる、ある種の不気味さをだ。ゆえに、彼はこのパーティーを余り楽しむことはできない。

もつとも、そんなことを感じていたのは直人だけだったようだ。

他の人間はパーティーを思いっきり楽しんでいるようであるし、彼とともにいた環までもどこかへ消えてしまっている。大方、他のテスターたちと旨い食事を楽しんでいるのだろう。ゲーム廃人ではあるが、環の対人スキルは高い。しかも、直人のことを考えている割には彼を置いて行くことが多々ある。今日も彼女は、直人をおいてきぼりにしたようだ。

一人で葡萄ジュースをドンドンと飲む直人。酒の空瓶よろしく、彼の近くのテーブルに葡萄ジュースの瓶が並んでいく。すると、その歪んだ光の向こうから男が現れた。三十手前のすかした男で、コートとタバコが嫌に似合っている。

「こんばんは、君一人かい？」

「あんた誰だ？ あいにく、俺は男と一緒にパーティーを楽しむ趣味はないぞ」

「なーに、一人だけ寂しくしてる奴がいたから声をかけただけさ。職業柄、変わった奴をみると止まらなくなっちまうんでね」

「職業柄？ 探偵でもやってるのか」

「そんなところさ」

男はそういうと、薄っぺらい名刺を差し出してきた。そこには明

田興信所代表、明田光と書かれていた。直人の眠そうな眼が少し開かれる。

「へえ、本物の探偵じゃないか。で、これから殺人事件でも起こるのか？」

「冗談っぽく直人は笑った。しかし、光は少し眼を細めるときざっぽく言う。

「俺はどこぞの疫病神じゃないぜ。だけど、事件は起こるかもな」

「え、まさか」

「そのまさかだよ」

光の眼の奥には、鋭い光があった。直人は虫がうごめくような感触を皮膚に覚える。彼はとつさに眼を細めると、周囲に視線を投げた。彼の眼が猛禽のように鋭くなり、周囲をとらえる。だがここで、光一が笑った。

「素人にはわかりやしねえよ。ま、せいぜい気をつけておくことだな」

光はポンと直人の肩をたたくと、いまだき珍しい煙草を燻らせながら立ち去ろうとする。ひよる長い背中が直人から遠ざかっていった。しかしここで、光は思い出したように直人の方へ戻ってきた。

「そういえば、君の名前を聞いてなかったな。なんて言うんだ？」

「……リアルネームか？ それともプレイヤーネームか？」

「そうだな、両方頼む。俺のプレイヤーネームも教えるから」

直人は少し考えた。この男に名前を知らせるこのメリットとデメリットを、天秤で量る。すると天秤はすぐにメリットに傾いた。

「リアルは柏木直人。プレイヤーネームはカズトにする予定だ」

「ありがとうございます。俺のプレイヤーネームはコゴローだ。それじゃ、今度こそさよなら」

光は今度こそ立ち去って行った。その足音を聞きながら、直人は一人で小さく肩を落とした。

「コゴローか。ずいぶんと名探偵を気どってる人だな……」

喧噪のなかに溶ける声。今回の出会いの意味を、まだ誰も知らなかった。

### 第三話 深夜

「事件？ 起きるわけないだろ」

「いや、でもまるつきり嘘を言っているようには見えなかった」

「その男の勘違いだ、ありえない」

パーティーの終わった深夜。それぞれの部屋へと向かう道すがら、環は直人の話を一笑にふしていた。ここで事件が起きるなど冗談としか思えない。このマルドウック社のセキュリティは万全、外部からの侵入はほぼ不可能。しかもテスターたちは厳重な持ち物検査をされているので、彼らによる凶器の持ち込みなどもない。

もし仮に何かをやれるとしたらマルドウック側の人間だろう。だが、それこそ動機がなかった。わざわざ自分で自分の首を絞めるような行為をする奴が、この世界にどれほどいるだろうか。環はせいぜい世界中に百人もいればいい方じゃないかと考える。

「妄想なんじゃないか？ 自分のことを探偵とか名乗ってたんだらう？」

「探偵じゃなくて、興信所の人」

「似たようなものだろう。とにかく、そいつの考え違いに間違いない」

環の声と視線は断定的だった。直人の顔が歪み、それに不満を告げる。だが、彼女はそれを覆すことはなかった。代わりに、先ほど

までとは違ったかなりやわらかい視線を直人に向ける。

「そんなことより、いいものを仕入れてきたんだ」

「へえ……」

「ほら」

環は携帯を取り出した。どうだとも言わんばかりの顔だ。そこには、見慣れない名前やメールアドレスなどが表示されている。こんな人物、環の周りにいただろうか。直人の顔が疑問を呈すると、すぐさま環が疑問に答えた。

「パーティーで連絡先を交換してきたんだ。このメンバーで、ギルドを設立するって話になってる。どうだ、入らないか？」

「ギルド？」

「ああ、ゲームとともに攻略する仲間の集まりってことさ。組むといろいろ有利なんだぞ」

「うーん、俺はあんまりそういうのは好かないな」

「そういつと思ってた。だけど、ギルドへ入るとほんとにいいんだぞ」

「……具体的には？」

視線が揺れる、肩が揺れる。直人の心が揺れている。環にはそれが手に取るようにわかった。ここで畳みかければ、確実に直人は

ギルドへ入ってくれるだろう。彼女の口が戦闘態勢を整える。

「ギルドでしか引き受けられない依頼を受けられるようになる。用は、新しい敵と戦えるってことだ」

直人の眼が見開かれた。環はニヤツと笑う。直人は戦いに中毒している、常に敵を求めている。これを聞いて、環の提案に乗らないはずがない。直人と一緒にゲームをプレイするという、幸せなヴィジョンが彼女の頭に投影される。しかし

「……その新しい敵って、モンスター？」

「ああ、そうだが。それがどうかしたのか？」

「じゃあやめとくよ。俺はモンスターとは戦わないんだ」

「は？　なあ、それはどういうことなんだ？」

「文字どおりの意味だよ。それじゃ、明日ゲームで会おうぜ」

直人はそのまま歩き去っていった。細く引き締まった影が、紅絨毯の敷き詰められた廊下の奥へと消える。環はそれを、どこか呆れたような顔で見送ることしかできなかった。

運命の朝。それは夏らしからぬ、とてもさわやかな朝であった。いつもよりも早く眼が覚めた直人は、すぐにゲームをする準備を済

ませるとVR機の前に移動した。時刻は六時四十五分。ゲーム開始まで十五分の余裕があった。彼はドーンと巨体を横たえているVR機の前の椅子に腰かけると、改めてその機械を眺めてみた。

「なんというか、棺桶みたいだよな」

独り言がむなしく響く。だが、そう言いたくなるのも無理はなかった。彼の視界に納められているVR機は、まさに棺桶というのがふさわしい形をしていたのだ。厳密には、古代の石棺に近いような造形をしている。

そのVR機は全体として黒曜石のような滑らかな材質で形作られていた。直人が試しに触ってみると、磨き上げられた鏡のようなつるりとした質感をしている。だが、その表面はほとんど余すところなく複雑な文字や記号、図式で覆われていた。その中でも十個の円を線で結び、ちょうど六角形を少し崩したような形をした図式が蓋の前面に大きくあしらわれている。

セフィロト 見るものが見ればわかる神秘主義の象徴的な図式。その意味が分かれば、最新科学の塊のような物体にこの図式が書かれているのに違和感を感じただろう。だが、直人は見るものではない。ゆえにわからない、不可解さに気がつかない。

「お、時間か」

長針が時を告げる。耳に心地よい館内放送が流れる。直人はすかさずVR機の蓋を開いた。カチツと留め金が外れ、重い蓋がゆつくりと持ちあがる。その分厚い外装の中には、やわらかそうなクッションがたっぷりと使われたリクライニングベッドが置かれていた。その様子は中身だけ入れ替えたようで少し違和感がある。ちょうど、



古い木の箱から最新のPCでも出てきたような感じだ。しかし、その違和感が気にされることはない。

ベッドは真ん中が少し落ちくぼんでいるデザインだった。直人はそのくぼみの中に、迷うことなく身体を埋める。直人の全身がクッションに包まれた。そのまま彼は脇のコントロールパネルに手をやると、赤い『起動』と書かれたボタンを押す。蓋が重苦しく軋み、閉じられた。

意識が闇に潜る。冷たい水が身体を覆うような感覚。仄暗い水の底へと突き進んでいくような不安感が、直人を襲った。しかしそれも一瞬のこと、すぐさま意識が浮上する。サルベージされた意識は白い中へと浮かび上がった。

気がつくと、直人は見知らぬ街に立っていた。彼の視界に幻想的で瀟洒な街並みが飛び込んでくる。赤を基調とした煉瓦造りの家々が建ち並んでいて、その隙間には広い通り。クラシカルで上品な恰好をした人や馬車がその通りを行きかっている。立ち並ぶ建物のベランダには観葉植物などが飾られていて、古き良き華のある時代を思わせた。

直人はそんな街の広場に立っていた。彼の周りには、同じようにやってきたと思われるプレイヤーたちが無数に並んでいる。学校の全校集会でも思わせるような様相であった。

「ここが、E L - O n l i n e の世界……」

直人はそういつと、手を握りしめた。力強い感覚が手のひらから帰ってくる。このゲームではアバターは現実準拠の容姿をしている。技術的な制約からなのだろうだが、それにしてもリアルな感覚だ。生身の状態で、この広場に立っているとしたら直人には思えない。頬を撫でるかすかな風や外灯の投げかけてくる光の温かみまでもが、鮮明に感じられた。

感心したように立ちつくしている直人。すると彼の頭の中で、ピコンと耳慣れない音が鳴った。

『メッセージが届きました！』

誰からだろう。直人はすぐさまメッセージボックスを呼び出すと、内容を確認した。ちなみに、一連の動作はあらかじめ渡されている説明書に書かれている。直人は説明書は読みつくすタイプの人間だった。

『私だよ私。いま広場の西の端にいる。昨日言ったギルドのメンバーですすでに集まっているから、見ればすぐにわかるはずだ。とりあえず、来てくれないか？』

「昔の詐欺かよ」

苦笑が漏れた。直人は微笑みながら指定された場所へと人をかき分けていく。すると中央の人だかりからやや離れたところに、また別の小さな人の集まりがあった。その中心には、見慣れた少女の影がある。

「お、来たか」

「来たかじゃないぞ。自分の名前ぐらいかけよ、オレオレ詐欺じゃないんだから」

「すまんすまん、プレイヤーネームと実名のどっちで書いた方がいいのかわからなかったのな。つい」

環は頭をかいた。その顔は笑っている。それに同調するかのように、彼女の周りに集まっていた人間たちも笑った。直人はそんな彼らにそつと視線を走らせる。

「えっと、ここにいるのはみんなギルドのメンバーなのか？」

「そうだ。みんな私の仲間だぞ」

「へえ、ずいぶんとたくさんいるんだな……」

直人が見たところ、全部で八名のプレイヤーがこの場に集まっていた。直人はその人数に感心したような顔をする。最初期の段階でこれだけの人数を集めるのはかなり難しいことだろう。もしかしたら、現在あるプレイヤーのグループとしてはもっとも大きなものかもしれない。前々から直人は環のことを顔が広い奴だと思っていたが、その認識を強めなくてはならないようだ。

八名のプレイヤーたちは、次々と直人に挨拶をした。それぞれ言い方は多少異なるものの、よろしくという意味の言葉が何度となく響く。環から事前に話を聞かされていたのだろう。彼らの挨拶はかなり親しげだった。あまり人とは関わらないタイプである直人は、少し戸惑ったようになる。彼は若干、言葉に詰まりながら全員に挨拶を返した。

こうして全員と挨拶が済んだところで、環が直人ににじり寄った。そして色っぽい声で告げる。

「直人、改めて聞くがギルドに入らないか？」

確定事項　環の声はそう告げていた。この期に及んで直人がギルドに入断ることを断るなど、彼女はまったく考えていない。人付き合いは苦手だが空気はそれなりに読める直人が、現状の雰囲気には逆らえないと踏んだのだ。だが

「すまん、やっぱ駄目だ。俺は一人の方が気楽でいい」

## 第四話 裏街

物事にはすべからく光と影がある。それは街とて同じ。どんな栄えた都市でも煌びやかな中心部だけでなく、アンダーグラウンドのような地区があるのは避けがたいことである。

星の大陸シャマインの中心都市である星王都にも、裏街と呼ばれる地区があった。ここは貧民街と闇市場を合わせたような場所で、脛に傷があるような連中が闊歩する場所である。強盗、密売、売春……およそ考えられる限りの犯罪行為が日常的に行われていて、治安を守る騎士団からもほとんど見捨てられている。巨大な掃き溜め王都の住人たちからはそのように揶揄され、同時に恐れられてもいた。

薄汚れた建物が並ぶ裏街の目抜き通り。ほとんどの建物は背が低く、壁はひび割れ、そこかしこに落書きがされていてさらには倒壊寸前。まともなのは派手な看板を掲げた売春宿くらいだろうか。それでさえも、通りに面している部分以外は吹けば飛ぶような粗雑な作りであるが。

「よくまあここまでリアルにつくつたな……」

裏街の入り口付近で、直人は呆れたように息をついた。VRMMOは、十五歳以上の者しかプレイしてはならないとされている。だが、だからといってこういう場所をここまで現実的に生々しく造っているものなのか。直人は保護者でも何でもないが「子供の教育に悪い」という言葉が素直に頭をよぎる。

しかし、こうして裏街が現実的に造りこまれているのは彼にとっ

ては好都合だった。

彼は興味の赴くままに視線を走らせながら、通りをゆっくりと進んでいく。直人は環たちと別れてすぐ、とある目的のためにこの場所へとやってきていた。彼はその目的を果たすべく、通りをできるだけ目立つようにする。肩をいからせ、顔はふてぶてしく偉そうに歩き方はできるだけ態度を大きく見せるように。すると早くもその効果が出た。

「おい、おまえ新入りか？　ずいぶんと態度がデケーな」

「新入りは小さくなってるよ、ああん！？」

いかにも三流といった雰囲気のチンピラが二人、直人に絡んできた。すり減つてところどころ色が変わった革の鎧、腰には腐ったような錆だらけの剣。元冒険者の、現やくざのなりそこないといったところか。直人の眉が、軽い興奮で吊り上がる。だが、彼の口は固く結ばれたまま開かれない。彼は男たちがどれだけ恫喝しようと、無言を貫き通した。

「てめえ、舐めてんのか！？」

キラリ。白い鋼が光る。月夜に現れた刃は、まっすぐに直人の方へと向けられた。男たちの顔が急激に緩む。これでこいつも大人しくなるだろう　勝利への確信。暴力への絶対的信頼。

だが、彼らは知るべきだった。自分たちの獲物が草食獣ではなく、牙をもった肉食獣であるということ。

「ふふ……」

口から洩れる笑みを、直人は抑えられなかった。その視線の先には、男たちのHPバーがある。もともとはそんなもの表示されていなかったが、男たちが剣を抜いた途端に表示された。つまり剣を抜いた途端、男たちは無害なNPCから正式な直人の敵になったということだ。

ウィンドウを展開、武器を選択。すぐさま重い鋼の感触が直人の手に現れる。彼は微笑みながらそれを握りしめると、男たちを睨みつけた。奥に煉獄の炎を秘めた、凶悪無比な猛禽の眼。鬼のような殺気があたりに进り、男たちの顔が蒼白となる。しかし、彼らは戦いを諦めない。

獲物になめられるな 取るに足りない小さなプライドと肥え太った過信。それが彼らをつき動かしていた。

「ハードブレイカー！」

「ラッシュアタック！」

重なる怒号、放たれる二つの剣。男たちの剣は稲光のごとき直線を描き、直人の懐へと飛び込もうとする。ヒュウつと心地よい風切り音が響いた。男たちの筋肉が躍動しながら一直線に伸ばされ、剣先に極限までの力がこもる。

システムに補助されたその動きに無駄はなかった。熟練の剣士が型を決めたとしても、なかなかこうはいかないだろう。洗練され、磨き上げられた機械じみた動き。だがしかし、今回はそれが災いした。

直人の足が地を擦った。その身体が、ほんのわずかに右にぶれる。距離にして五十センチもあるだろうか。だが、それだけの違いで剣は狙いを外れた。牙は不様に何も無い宙を貫き、愚かな獣たちはその無防備な横っ腹を晒す。貪欲にして優秀な狩人はそのすきを逃さない。

「うッ……」

喉元に冷たい鋼の感触。刃を前にして、男は情けなく呻いた。E L - O n l i n e には急所というシステムがある。その中でも喉元というのは、もっとも無防備でダメージが通りやすいポイントだ。そこを貫かれれば男の貧弱なHPなど やられずとも結果は見えていた。

「……このままで済むと思うなよ！」

「今日は見逃してやるだけだからな！」

もはや様式美。男たちは負け犬の鏡とでもいうべき捨て台詞を吐き捨てる。彼らは身体をよろめかせながら、一目散に通りの奥の闇へと消えていった。

『無名のころつき：レベル1を2体撃破した！ 200ポイントの経験値を獲得！ レベルが3に上昇しました！』

響いた無機音声 勘が正しかったことの知らせ。直人は口元を歪め、ほくそ笑む。

「やっぱり。NPCと戦えるんだな」



ヒュウと口笛が響いた。狩人の狩りは、まだまだ始まったばかりだ。

あれからしばし時が流れた。世界は未だ仄暗い。どうやら、この世界に昼はないようだった。その代わりに、地球では考えられないような星空が天を満たしている。無数の星が投げかける幾万もの光の群れが、街や人を穏やかに照らしている。そのおかげで、外灯がなくなるとも人の顔が認識できる程度の明るさは保たれていた。

華やかな街灯に彩られた表通りを、直人は唸りながら歩いていた。「狩り」はひとまず切り上げている。

「700シルト……。はじめが100シルトだから、まあまあの収穫か」

アイテムボックスから出したコインが、指の上でチャラチャラと鳴る。銀貨が一枚に、銅貨が二十枚。ごろつきたちが落としていった物を換金した結果だ。その結構な重量感に、直人の頬が緩む。

「さて、何かいい武器買えないかな？」

プレイヤーの初期装備は剣であった。だが、直人は剣がイマイチ手に馴染まない。やはり刀がいいのだ。三流のごろつき相手ならこれで十分だが、敵はそれだけではなくてきている。狩りの最後の方では「無名のごろつき：レベル3」というものまで登場してい

た。無名のごろつき以外の敵が登場するのもすぐだろう。

ふらりふらり。直人は商店の立ち並ぶ地区へと差し掛かった。時刻は昼過ぎ、割合人出の少ない時間帯である。この商店街も現実と同じで、朝通りがかった時よりは幾分静かだ。しかし、直人と同じようにひと狩り終えたらしいプレイヤーたちの姿がそれなりに見られ、そこそこには繁盛している。道に半ばはみ出すように並べられたさまざまな商品やそれを見る人々が、通りを圧迫していた。その狭い中を、直人は視線をチラチラとさせながら進む。

直人が店を冷やかしながら歩いていると、一軒、変わった雰囲気のお店があった。周りの店が軒先に商品をはみ出さんばかりに並べて必死に客引きをしているのに対して、その店はドアを閉めている。ただ「営業中」と書かれた小さな札がドアに掛けられているだけだ。しかも、店の建物自体も随分と洒落たもの。通りに面した小さなカフェ、といった趣か。格子のはまった上部がアーチ型の窓と、青さびの浮いたノブがついた飴色のドア。それらがどこか周りから宙に浮いたような雰囲気漂わせている。

なんとなく、心惹かれた。直人の手が伸びる。そのまま手はノブをつかんで回しドアを引く。チリンと涼やかな呼び鈴が響いた。店の中から黴たような風が流れてくる。しかし、そのすえた様な匂いには不思議と不快感はない。むしろ、なにかしら懐かしいような感じがした。直人の足が、眼前に広がる薄暗闇の中へと踏み出される。

店内は異世界だった。闇に隔てられたその場所は、骨董の眠る墓場のようなものである。闇の中にさまざまな品がまどろんでいて、時が止まっている。その止まった時間においては埃一つ微動だにはせず、直人は自身の心臓の脈動が異常なものにさえ思えた。生と静は交わらない。それがこの小さな世界の理のようだ。

「へえ……」

直人は息を殺しながら、ゆっくりと店内を見て回る。この店には、実にさまざまな商品があった。壁に掛けられた怪しげな魔法陣から、部屋の端に鎮座する巨大な鳥の形の置き物まで、世界中のものを手当たり次第に集めたといったような状況だ。商品に統一感など欠片もなく、散らかった店内は整理整頓には程遠い。この店を見るには「慣れ」が必要そうだ。

こうして直人が足元や周囲に注意しながら歩いていると、キイという音が奥から響いた。普段なら聞きとることすらできないであろう、ささやかな音。されどそれが、この空間においては異様に大きく響きわたる。誰か来る　直人にはそれがわかった。

「いらっしやい。なにか、捜しているのかえ？」

しがわれ、枯れ果てたような濁った声が響く。しかし、それを発する声の主は見たところ若かった。蠟のようにいやに白くてつやつやとした肌、紅を差したような色っぽい唇に透き通るシルバークラウンの瞳。そして、男には刺激的に過ぎる豊かな肢体。直人の眼がその身体、とくに先ほどからかすかに波打っている豊かな果実に奪われる。

「……か、刀を捜してる」

「刀かい。どれ、ちょっと見てやろう」

女が滑った。いや、厳密には歩いたのだろう。が、直人には確かにそう見えた。まるっきり足音もなかった。

「なかなかいい体つきをしてるじゃないか。へえ、こりゃ剣術の心得があると見たね……」

舐めるような視線。淫らで、それでいて鋭い。こわばった直人の声帯が、警報音よろしく僅かな声を漏らす。

「……うッ」

「怖がるんじゃない。誰もあんたを喰おうなんて思っちゃいないよ。……別の意味では喰われたいと思ってるみたいだけどねえ……」

艶めかしく微笑む女。その笑みには凄惨な深みがある。足を踏み入れれば抜けられない、さながら底なし沼か。

「帰ってもいいか……」

「もう帰っちゃうのかい？　せつかくあんたにちょうどいい武器がわかったってのに。うぶだねえ……」

「わかった？　なら早速見せてくれ！」

「……よっぽど、戦いが好きなんだ」

眼の色を変えた直人。おやおや、とばかりに女は息をついた。彼女は一旦店の奥に引つ込むと、包みを携えて戻ってくる。一抱えほどもある、細長い包みだ。直人の視線が細くなり、燃える。

「ふふふ、うちでも自慢の一品だよ。ほれ」

「おおっ……」

漆黒の伸びやかな刀身。一切の無駄なく引き締まったその地金に、白の波紋が波打っている。砂浜に打ちつける荒波のようなそれは、この刀の力を象徴しているよう。光を跳ね返し乱反射を起こすそのさまたるや、まさに芸術だ。すべてが殺戮のために造られた至高の作品。刀匠が造り上げた殺しの申し子。究極の実用性は究極の美しさを兼ねる。直人はそう思わずにはいられない。彼は呆けてしまったように、宙ぶらりんの視線で刀を眺める。危ない薬でも飲んだかのようなだ。

「気にいったね。だけどこいつは高いよ、あんたに買えるかい？」

「いくらなんだ。金ならなんとかする」

「ふふふ……」

女は指を一本立てた。直人は息をのむ。

「10000シルトか？」

「そんなに安く売ったらうちが潰れてしまうよ……。100万だ、100万シルト用意しな」

女の眼は真剣そのものだった。100万シルトという値段は、残念ながら冗談ではないようだ。

## 第五話 アニキ

裏街でごろつき相手に狩りを繰り広げる直人。結局、彼は見せられた刀ではなくもつと格安の刀を他の武器屋で買っていた。その価格、五百シルト。あの刀の二千分の一だ。一応、日本刀なのでそれなりにはしっくりくる。しかし、直人の頭からあの刀は離れてくれない。

「欲しいなあ……」

愚痴をこぼすと、直人はふっと息をついた。百万シルトは途方もない大金だ、用意するのにどれだけかかることか。直人はお先真っ暗に思えてならない。しかしかといって、あの刀はあきらめきれぬものではない。名刀は直人にとって麻薬に似ている。戦いに飢えた者は、同時に己の牙たる良い武器にも飢えていた。

金だ、金が必要だ。心のどこかにわずかだが、焦りがあつた。直人の「狩り」に、先ほどまでより熱が入る。手にした日本刀も幸い、値段相応以上の働きをしてくれてはいた。そのことがさらに狩りを加速させる。

そうして気がつくと、直人は裏街の若干奥まった場所にいた。高い建物に挟まれた細い路地裏で、ごろつきたちに囲まれている。ごろつきたちの数は五人。彼らはいずれも、余裕たっぷりとばかりに下卑た笑いを見せていた。黄色く歯が乱雑に並ぶ口元から、聞くに堪えない野太い声が漏れている。

「へへ、追いつめたぜ」

「アニキがお前にお話があるそうだ」

ごろつきたちはスツと道をあけた。その向こうから大柄な男が現れる。周囲のごろつきたちよりも頭一つ大きく、その身体は鋼のように鍛え上げられている。褐色の肌がはちきれそうなほどの盛り上がりを見せていて、着用しているレーザージャケットのボタンが干切れそうだ。筋肉の塊　そう呼ぶのがふさわしい。その巨体の上には「無名のアニキ：レベル1」と表示されていた。

「名もなきアニキか……。どっかの世紀末みたいなやつだな」

「せいきまつ？　よくわからんがまあいい。お前にはここで死んでもらう！」

拳が飛んだ。大木のごとき剛腕が唸りを上げる。メリケンサックを嵌めた鉄拳が石畳を打ち砕き、地面が爆ぜた。とっさにその攻撃を回避した直人は、思わず眼を剥く。

「やばい威力だな」

地面にクレーターよろしく穴が開いていた。大きさはざっとみて人の胴回りほど。この街の石畳に使われている石は質が良く、そこらのアスファルトよりよっぽど頑丈だ。そこにこれほどの穴を開けるとは、どれほどの威力か。直人の目つきが陰しくなり、雰囲気が変わる。

「オラオラオラア！！」

繰り出される暴風のような攻撃、隙だらけだ。しかし、その隙を埋めてしまうほどの気迫と威力がある。まるで暴走列車。とても、

人の手で止められるようなものではない。直人は回避に専念する。

少しずつ、直人の背中に壁が迫ってきた。やがて、煉瓦の継ぎ目のはつきりと見えるようになる。時間がない。直人の頭を緊張が走る。壁に追いつめられれば勝ち目はない。

「そりゃッ！」

足が地を蹴る。直人の身体が真横に跳ねた。拳が宙を切り、アニキの身体が止まり切れず壁に飛びこむ。直人はすかさずその巨体の後ろへ回り込むと、刀で一気に斬りつける。

響いた金属音。刀が跳ねた。直人の手に、抑えきれないほどの激しい反動が返ってくる。まるでゴムの塊でも殴ったようだ。直人の上体がわずかに仰け反り、眼が驚愕に白く染まる。

「チッ！」

「俺様のマッスルボーディーを舐めんなよ！」

アニキは直人に吠えると、振り向きざまに重い一撃を放った。クリンヒット。隙が出来ていた直人に、拳がめり込む。身体がボールのように吹き飛び、直人の意識はまたたく間に白に堕ちていった。

気がつくと、直人は広場に立っていた。ゲーム開始時のあの広場だ。彼は意識を取り戻すと、慌ててステータス画面を確認する。すると所持金と経験値がそれぞれ半分ほどごっそりと減っていた。デスペナルティ。直人はアニキに倒されてしまったようだ。



「クソっ、レベルが足りないのか？」

刀を筋肉ではじき返すなど、現実では超常現象の領域だ。間違はなくあり得ない。しかしここはゲームの世界。ダメージを与えられないということは、単純にレベル不足か敵に耐性があつたということだ。直人はいら立ちを抑えつつ、ここ一時間ほど見ていなかったレベルの欄を確認してみる。

「なんだ、結構上がってるじゃないか……」

レベルの欄には「13」と表示されていた。一時間前には二桁になつたばかりだったので、かなりのハイペースだろう。直人の心がわずかだが落ち着きを取り戻す。自分が弱かつたわけではない、アニキが強かつたんだ。軽い自己暗示。それが少年の心を安定させる。

ここで突然、西から鐘の音が響いてきた。街の西端に聳える大聖堂の尖塔より、澄んだ音が街全体に舞い降りてくる。カランカラン。軽快で耳に心地よい音が、全部で七回響き渡った。午後七時の合図だ。

「もうこんな時間かよ……」

直人はウィンドウを出すと、迷わずログアウトのボタンを押した。すぐさま彼の身体が陽炎のように透けていき、意識が白くぼやける。気がつくと彼は、見慣れた寝室の天井を見上げていた。

紅絨毯の上に並べられた数十のテーブル。その奥の窓からは、銀河の中心のような夜景が覗いている。時刻は午後七時過ぎ。直人は食事をするべく昨日と同じ食堂に来ていた。相も変わらず贅をこらした作りをしている場所であるが、昨日に比べてかなり人がまばらだ。おそらく、まだゲームをやっている者も多いのだろう。

中央のテーブルに山盛りとなっている料理。直人は大皿から手持ちの皿に何種類かの料理をバランスよく盛ると、隅の方のテーブルに着こうとした。しかしここで、見知った顔が見えた。その顔は直人を確認すると同時に輝きを増し、彼の方へと近づいてくる。

「偶然だな、一人か？」

「もちろん」

「じゃあいつしよに食べないか。私も今日は一人なんだ」

見知った顔　環はおいでとばかりに手を振る。その手の先にあるテーブルは、すでにテーブルクロスがよく見えないほど料理が並べられている。直人は環の食欲に苦笑しながらも、誘いに乗る。彼は狭いスペースに手持ちの皿を置くと、よっこいしょとばかりに腰かけた。

「今日はどうだった？」

「まあまあつてとこだな。ゴブリンがちょっとしたレアアイテムを落としたぐらいか。そっちは？」

「ドロップアイテムとかはとくにない。ただ、レベルが13まで上がった」

「13だと!？」

テーブルが揺れ、響く衝撃音。環の顔が直人の方にグッと迫った。直人は彼女の剣幕に、思わず椅子を後ろに下げる。

「……どうかしたのか？」

「一日中狩りをしていた私たちでも、レベル9になるのがやっとだったんだぞ。お前、なんでそんな高レベルなんだ？」

環は疑わしげに眼を細めた。直人はゲームの初心者だ。効率のいい経験値の稼ぎ方など、全く知らないはず。それが、環たち準廃人を追い越すなどとは考えられなかった。しかし、直人は環の疑惑に真っ向から反論する。

「ごろつき相手に戦ってたら、いつの間にかここまで上がってたんだ。嘘じゃない」

「ごろつき？ 割のいいモンスターの何か？」

「モンスターとは戦わないって言っただろ。そうじゃなくて……」

直人は今日のことを順繰りに説明していった。それにしたがって環の顔が、だんだんと変化していく。疑いから呆れへ。直人が気がついたころには、彼女の小さな口は顎が外れそうなほど開かれていた。さらに、どこかぼんやりとした眼は茫然と直人の方を見据えている。

「……お前、ほんとにそんなことしてたのか？」

「ああ、間違いない」

「……ここまでお前が非常識だとは知らなかったぞ」

「非常識とは何だ、非常識とは」

「いや、常識的に考えればNPCとストリートバトルもどきなんてしないだろ。そもそもNPCと戦えるなんて考え、どこから思い付いた？」

直人は首をひねり、わずかばかり考え込むような動作をした。そして。

「ただ何となく」

「何となくって……」

ハアと環の口から大きなため息が漏れる。おそらく、本当に「何となく」なのだろう。直人の眼はまっすぐに純真。環には嘘を言っているようには見えないし、また嘘をつく必要性もない。

その後、環と直人は話題を変えて楽しく食事をした。そうして食事を終えると、二人は食堂を出て互いの部屋に向かう。絨毯の敷かれた一流ホテルのような造りの廊下を、寄り添うようにして二人は歩いて行く。

「そういえば」

思い出したように、環の口が開かれる。直人の視線が、ふっと引き寄せられた。

「八時からテスト初日を記念して、花火が上がるらしい。それで花火が終わる十時に大切な発表とやらがあるそうだ」

「へえ、どこで聞いた？」

「ギルド。お前、ギルドにも行っていないのか？」

「まあな。一日中戦ってたから」

やれやれ　ため息交じりに両手を上げる環。彼女は疲れたような顔を直人に向ける。

「今日はもう閉まってるだろうが、明日は必ずギルドへ行くんだぞ。重要な連絡とか、ギルドを通じてされることもあるんだからな」

「わかったよ。それじゃあな」

「じゃあまた明日。無理しすぎないようにな。私はお前のことが心配なんだから」

環の優しい声に、黙ってうなづく直人。ふわりと、春風のような心地よいものが通り抜ける。二人はそのまま、互いに廊下をはさんで向かい合った扉へと吸い込まれていく。この時、彼らは知らなかった。明日という言葉が、どういう意味を持つのかを。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2802y/>

---

EL-Online（改）

2011年12月21日12時57分発行